

「神の約束が実現する時」

エレミヤ書
マタイによる福音書

第31章 10節～14節
第2章 16節～23節

説教 岡村 恒牧師

私たちが住むこの地上に、神の約束が成就し始めています。その完成の日を目指して、なお実現し続けています。私たちがこの目で見ている世界の姿と、聖書が明らかにする真実の姿とは異なります。新年を迎えて10日余りが経ち、多くの出来事がありました。既に、喜びが退いて、悲しみや恐れ、不安を抱いている方も少なくないでしょう。しかし聖書は、確かにこの世界で神の約束が成就しつつあり、やがて完成するのだと断言します。

ところが、主イエス・キリスト誕生直後の物語を読むと、この宣言を信じるのが困難になります。ベツレヘム近郊の2歳以下の子どもが皆殺しにされ、この地方は嘆きと悲しみの叫びに満ちました。しかし聖書は、この悲惨な光を当てながら、預言者エレミヤを通して語られた神の約束が成就していると語ります。

なぜ神は、ヘロデのような残虐な王をお立てになったのでしょうか。ヘロデは即位直後に反対者三千人を殺した、とも言い伝えられています。これは、今日の私たちには無縁な、過去の残酷な王の話でしょうか。自分に反対する者、自分に損を与える者を取り除こうとしたヘロデ王の姿は、今ここにいる私たちと重なるのです。博士たちを遣わして、自分の地位を脅かす存在を抹殺しようとしたヘロデ王は、自分を中心にして生きる私たち自身です。自分に不安を与えるような者を徹底的に取り除いて、自分の判断や計画を最優先にする。心の中で、繰り返し他者を排除して生きようとするのが私たちです。

心の中で、「あんな人はいなければよいのに」とか、「私の人生にあの人が関係なければよいのに」と思う時、私たちの中のヘロデが顔をもたげます。神に喜ばれる者として生きたいと願いながら、私たちは繰り返し神の御心に背くのです。

「叫び泣く大いなる悲しみの声がノラマで聞えた。ノラケルはその子らのためになげいた。ノラらがもはやいないので、ノラめられることさえ願わなかった」。(18節)エレミヤは、エルサレムが破壊され、イスラエルの人々がバビロニアに連れて行かれる時に、深い悲しみの叫びが響く中で、神ご自身の救いの約束が聞こえると語るのです。

「わたしは彼らの悲しみを喜びにかえ、彼らを慰め、憂いの代りに喜びを与える」。(エレミヤ書 第31章13節b)

預言者エレミヤに与えられた神の救いの約束です。私たち自身の罪がこの世界全体を覆い尽くし、悲しみと争いは絶えません。そして、私たち自身の力では、解決の糸口さえ見つけることができません。しかしこの私たちのただ中に、神はひとり子、主イエス・キリストをお遣わしになりました。

今朝の御言葉には、大いなる『喪失』の物語が記されています。ベツレヘム近郊では多くの人々が喪失の故に嘆き叫びました。クリスマスの喪失の物語は、しかし、さらに大きな喪失を指さしています。全知全能の神ご自身が、ひとり子をその懐(ふところ)から失われたのです。全てのものが創造される前から父なる神のみ懐におられたお方を失ったのです。ベツレヘム全体を覆った悲しみを、父なる神ご自身が引き受け、味わって下さいました。

私たちが、神に赦され、本当の命を得ることができるようになるために、神はこの大いなる喪失を引き受けて下さいました。神は、空虚になったその懐に私たちを迎え入れて下さるために、主イエス・キリストをこの地にお与え下さったのです。

誰でも、このひとり子を救い主と信じるなら、神の元から失われた存在であったのに赦され、滅びるべき者であったのに神の命を注ぎ入れられて生きようになります。終わりの日、自分自身を神のものとして発見することになります。

神の懐で、本当の命を味わい、喜びを噛みしめる日が来るのです。深い暗闇の中をうごめいていた私たちを、神の栄光が包み込んでいます。やがて終わりの日に、神の喪失は満たされます。私たちがそこで、永遠の命を喜び、神をほめたたえるようになるからです。

主イエスは再び地上に来て下さいます。私たちのために十字架にお架かり下さったお方は復活され、今も生きておられるので、やがて終わりの日に再び来て、私たちを神のみもとに迎え入れて下さるのです。

(記 岡村 恒)